15

世界文学全集

嵐が丘

E・ブロンテ／田中西二郎訳

世界文学全集　15

嵐が丘

エミリ・ブロンテ

訳者　田中西二郎

発行／1971年6月30日　7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／二光印刷株式会社　製本所／大進堂製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／日本紙パルプ商事株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1971

目次

嵐が丘 …… 3
エミリ・ブロンテ …… 449

Wuthering Heights

by

Emily Jane Brontë

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

嵐が丘

1

一八〇一年

僕はいましがた、こんど借りた家の家主をたずねて、帰ってきた――これからの僕がかかりあいになるたったひとりの隣人を。まったくここはすてきな田舎だと思う。イングランドじゅうさがしても、これほど世間のごたごたから隔離された場所が選べようとは、思いもよらなかった。人間ぎらいどもにとっては申しぶんのない天国なのだ――しかもあのヒースクリフ氏なる男と僕とは、ふたりしてこの寂しさを分けあうのにおあつらえむきの好一対ときている。いや、すごい男もいたものだ！　僕がうまで乗りつけたとき、あの男の黒っぽい両眼が、いかにもうさん臭そうにまゆ毛の下へ引っ込みたがっていた、その顔つきといい、つづいて僕が名を名のったときには、チョッキの裏へ差し込んだ両手の指先を外へだしでもすることか、すこしでも気を許すまいとするように、なおさら奥へ押し込んだ様子といい、僕のほうではたまらない親しみを彼に感じてしまったのだが、むろん先方はそんなこととは夢にも気がつかなかった。

「ヒースクリフさんでいらっしゃいますか？」

一つうなずいたのがその返事だった。

「今度、お家を拝借したロックウッドでございます。わたくしがあまりしつこくあのスラシュクロス屋敷に住まわせていただくようにお願いしましたもので、ご迷惑だったのじゃないかと思いまして、そのおわびかたがた、ご当地へ参るとさっそくごあいさつに参上しましたわけです。昨日うかがったところではなにかべつにお考えもありましたような――」

「スラシュクロス屋敷はわたしの持ち家ですからな」まゆをひそめて僕をさえぎり、「せんでもすむ迷惑なぞ、他人にかけられてたまるもんですか――まあおはいり！」

このまた「おはいり」が、口を結んだままのモゾッとした言いかたで、内心のところは「とっとと失せおれ」と言いたい気持ちだということがはっきりわかるうえに、彼のもたれかかっている門の扉さえも、このことばに応じて動こうとするようすもみせない。ところが僕は僕で、こんな調子だからこそ誘いに応じる気にもなったので――つまり自分以上にことさらに人づきあいのきらいなことを見せつけるこの男が、すっかりおもしろくなってしまったのだ。

僕の乗ってきたうまの胸が、木戸をまともに押しつけるのを見とどけてから、やっと相手は手をふところから出して錠をはずし、さてふきげんな顔で先に立って、盛土道を歩いて行ったが、中庭へはいったところで、「おいジョウゼフ」とよび、「ロックウッドさんのおうまを連れてゆけ。それからぶどう酒を持ってこい」

（なるほど、すると召使いはひとりしかいないな）という考えが、この二つの命令を一度にしてのけたのを聞いて、おのずと僕の頭に浮かんだ。（道理で、敷き石のあいだの草は伸びほうだい、人間のかわりに家畜にばかり生垣の芽を摘ませてるわけだ）

ジョウゼフはもういい年をした――いや、たっしゃそうながんじょうな足腰はしているけれど、もう老人の部で、おそらくひどい年寄りにちがいない。「ああどうぞや神様！」と、さもいやな用事と言わぬばかりにぶつぶつひとりごとを言い、うまを僕の手から引き取りながら、渋い顔をして目も離さずに僕の顔をあまりじろじろ見るから、こちらもかわいそうになって、きっとこのじいさん、神さまのお助けを求めてるのは昼飯がよくこなれますようにとお願いしているので、なにも僕がふいにやって来たために信心ぶかい文句を口ばしったわけでもあるまいと、善意に解釈しておいた。

「嵐が丘」というのが、ヒースクリフ氏のすまいの名だ。「ワザリング」とは、嵐のときにこの丘のようなところに吹きすさぶ風の怒り騒ぐさまを形容した、巧みなこの辺の方言である。なるほどあの高みでは、さぞ清らかな、凛烈な大気が、絶えまなく吹きかよって

いることだろうと思わせる――がけ越しに吹きつける北風の威力は、家屋の端のところのいじけた数本のもみの木が、ひどく斜めにのびていることからも、また立ちならぶやせこけたいばらの枝々が、どれもこれも、こじきのように日光の恵みをもとめて、一方へばかり腕さしのべているさまからも、容易に察せられるだろう。さいわいに設計者がこの家をがんじょうに建てるだけの先見をもちあわせていたとみえ、幅のせまい窓は壁から奥ふかく設けられているし、すみというすみは大きな張出石で風を防いでいる。

敷居をまたぐ前に、僕は立ち止まって、建物の前面、ことに正面の扉のあたり、惜しげもなく彫り散らされた奇怪な装飾彫刻を賞美した。扉の上、くずれかかった半獅半鷲神どもと、恥知らずな姿をした男の子たちが群がっているなかに、「一五〇〇年」という年代と、「ヘアトン・アーンショオ」という名まえとを見つけだした。二言三言、それについて感想を述べ、にがい顔のこの家のあるじから、この屋敷の手短かな来歴をでも聞き出そうかと思わぬでもなかったが、戸口に立ったときの主人の態度は、さっさとはいるか、さもなくばグズグズせずに帰ってもらいたいらしいそぶりだったので、まだ奥の様子も見ぬうちに、その癇癖をよけいにつのらせるのはまずいと考えなおした。

ロビイも通路も、なんのついでもなしに、いきなりひとまたぎで、家族居間のなかに連れ込まれた。こういう部屋のことをこの土地では格別に「家」と称している。通例は台所と内座敷もそのなかに含まれるのだが、〝嵐が丘〟では台所だけは他の一角に立ちのかされているらしい――少なくとも家のずっと奥のほうに、人の話し声と台所道具を扱う物音とが、僕の耳には聞き分けられた。のみならずこの部屋の大暖炉には煮たきをしたりパンを焼いたりしている形跡はなく、壁にも、ピカピカ光る赤銅なべや錫の水漉器なども一つも見えない。もっとも、室の一隅に雄大なかし材のたながあって、数かぎりもない白鑞製のさらが幾列にも積みかさねられ、あいだに銀製のつぼや大コップも交えて、層々と屋根までとどくおびただしいそれらの列が、すさまじく大炉の光と熱とを反射させていた。

屋根には天井板がまるでなく、気をつけてながめまわせばその臓腑のすみずみまで明からさまに見て取れるが、ただ一個所、わく木を取りつけて、燕麦菓子や牛肉、羊肉、ハムなどのたばねた足をつるしてあるところだけ、屋根がふさがっている。炉の上には、さまざまな憎々しげな古い小銃と、一対の大型拳銃とがおかれ、張出縁にそって、毒々しい色に塗った茶葉入れの小箱が三つ、飾りのつもりらしく並べてある。床はなめらかな白い石敷で、いすはもたれの高い、素朴な造りの、緑色に塗ったので、薄ぐらいあたりに重そうな黒いいすも一つ二つ、わだかまっている。食器だなの下の弓形の空間に、大がらな肝臓色のポインタァの雌が一匹、キーキー声で鳴く一群の子いぬに取り巻かれて、ねそべっていて、ほかにも何頭かのいぬが、ほかのくぼんだ場所をうろうろしている。

部屋も飾りつけも、ありきたりの質朴な北国の農夫の家に見かけるものと、どれ一つとして風変わりなところはない。頑固一徹なつらがまえ、ひざきりズボンにゲエトルといういでたちに、そのたくましい腕や足を引き立たせたお百姓が、こういう居間のひじかけいすに腰をおろし、丸テエブルの上のビールのあわを浮かべたコップを前にしている図は、晩餐後のしかるべき時刻をみはからってゆきさえすれば、この近傍の山中五、六マイル以内のどこででも見られる。だがヒースクリフ氏は、氏の住居や生活様式とは、はなはだ奇妙な対照をなす人物だ。この人は、風貌は皮膚の色の黒いジプシィのようで、みなりと物腰とはジェントルマンである――いいかえれば、たいていの田舎の地主さまにひけをとらぬ程度の紳士である。いくらか自堕落には見えるかもしれぬが、その投げやりなところがそうたいしてふつごうにも感ぜられないのは、その風采がキリッとして端麗だからで、それにどちらかといえば取りつきにくいところもある。それを、ひとによっては、よっぽど品のわるい高慢なやつだと思うこともありそうだが、僕にはなんとなくこの人に共鳴を覚えるものがあって、まるで異なった感じをうける。ひとを寄せつけぬ彼の態度は、ことさらに感情をむきだしに見せつけるのを――人間どうしの好意を形にあら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

わすのを――避けようとする気持ちからきていることが、僕には直覚的に、わかるのだ。愛するにも憎むにも、ひとしくこの人は心の内側だけにとどめて、逆に他人から愛されたり憎まれたりするのは無益無用のことだとけいべつしているのだろう。――いや、これは少し早まりすぎたかもしれぬ。これでは僕自身の性格をほしいままに彼に押しつけてしまっている。ヒースクリフ氏が、押しつけがましくちかづきになろうとする相手に会ったときに、そ知らぬ顔でそっぽを向くのは、同じような場合の僕自身の気持ちとは大きに違ったわけがあってのことかもしれないのだ。むしろ僕の気質のほうこそ人並みはずれていると思うべきだろう――現に僕の生みの母が、おまえはきっと幸せな家庭はもてないよと、口ぐせに言ったくらいで、しかもまったくそのとおりであることを、この夏、みごとに自分で証明してしまったのだから。

すがすがしい海べの一カ月を楽しんでいるうち、僕はゆくりなく身も魂も打ち込みたくなる相手にぶつかってしまった――その相手が僕に目もくれなかったうちは、彼女は僕の目には女神としか見えなかった。僕はけっして口に出しては「思いのたけを告げまいらせず」（訳注 シェークスピア『十二夜』中の有名な句）にいたが、もし目が口ほどにものをいうものなら、どんなばかでも僕がくびったけなことはわかったろう。彼女もとうとうわかってくれて、流し目を返してくれるようになった――そのまなざしのうるわしさ、まったく想像を絶していた。ところで、僕はどうしたか？　恥ずかしいが白状する。――氷のようにかじかんで、かたつむりのように自分の殻のなかへ逃げ込み、ちらりちらり見られれば見られるほど、ますます冷たいそぶりでよそよそしくしりごみしてしまうのだ。だからとうとうかわいそうに、初心なお嬢さんは、自分の勘ちがいだったかと思うようになり、たいへんなまちがいをしでかしたと思い込んだものだから、どうしていいかわからなくなって、そこそこに母親をくどいて引き上げて行ってしまった。僕はこういう奇妙な性分のおかげで、ひとからはわざとそんな冷血な仕打ちをする男のように言われるようになったが、この定評のはなはだしく不当なことは、

自分にだけはよくわかっているのだ。

あるじが炉石の一方の端へ歩み寄ったので、僕はその向こう側の端に席をとったが、例の親いぬがいつのまにか子いぬたちのそばを離れて、くちびるをそりかえらせ、白い歯によだれをためてかみつきそうに口を開いて、おおかみのように僕の足のうしろに忍び寄っていた。しばらくは話もない所在なさに、そのくびをなでてやった。すると雌いぬはのどの奥から長いうなり声を出した。

「そのいぬにはかまいなさらんがいい」ヒースクリフ氏がそれにつれてうなるように言いながら、それでもいぬがそれ以上はげしい所作をしないように、足をあげてぽんとけりつけた。

「甘やかされることは知らんやつです——なぐさみに飼っとるのでないから」そして、横側の扉のほうへ大またに歩いて行って、また大声で「ジョウゼフ」とどなった。

ジョウゼフは穴蔵の奥でなにかぶつぶつ言ったが、すぐ上がってきそうな返事はしないので、あるじのほうから彼のところへ降りて行った。あとには僕が、例のおっかない雌いぬと、雌いぬと同じように僕の一挙一動を油断なく見張っている羊用番犬二匹、これも恐ろしげな毛むくじゃらのやつらと、さしむかいで残されることになった。やつらのきばにかかるのは、あまり感心しなかったから、僕はおとなしくすわっていた。だが、口に出してさえ言わなければかにしたってわからぬだろうと思ったのが運のつきで、いい気になって目をパチクリしたり、ふざけた顔をしてみせたり、その三匹をからかっているうちに、いろいろ変わる顔のかっこうのなかで、ひどくいぬ奥さまのごきげんにさわる人相があったとみえ、いきなり腹を立てて僕のひざに飛びついてきた。僕は突きもどして、あわててテエブルの向こう側へのがれた。これがキッカケで、はちの巣を突いたようなことになり、大小老若さまざまの四つ足の悪鬼どもが六匹、それぞれの巣窟から、まんなかの広いところへ現われ出た。おもにかかとと上着のすそとをねらって飛びついてくるようだ。一生懸命、火かき棒で大きいやつの攻撃をどうにか受

けながしてはいたものの、僕はやりきれなくなって、大声でだれか来てこの場をとりしずめてくれと、家の者の救援を求めた。

ヒースクリフ氏と下男とは、しゃくにさわるほど平気の平左で、穴蔵の階段を上がってきた。暖炉の前は、かぶりつく、ほえる、ものすごい修羅場と化しているのに、ふだんより一秒と急ぐけはいもない。さいわいほかにひとり、台所からいち早く出てきてくれた人がある。大がらなおばさんで、上っぱりのすそをからげ、火のほてりで真っ赤なほお、まくり上げた腕にフライなべを振りまわしながら飛び込んできて、われわれのまんなかへ割ってはいり、得物ばかりでなく舌を使ってまくしたてると、とたんに魔法のように嵐がしずまり、たちまち暴風のあとの海のように胸を波うたせている彼女ひとりのほか、だれもいなくなったときに、やっと彼女のだんなが現われた。

「いったいこりゃなんたることです！」僕の顔をにらみつけてのこの言いぐさには、さんざんな虐待をうけた直後だけに、さすがに僕も我慢がなりかねた。

「なんたることだろう、まったく！」と僕はつぶやいて、「悪鬼につかれたぶたの群れだって、お宅の畜生どもほど根性がわるくはなかったでしょうな。あなたは初対面の客をとらどもといっしょに置き去りにでもするかただ！」

「なにもしない人には、手出しはせんはずだ」酒びんを僕の前において、テエブルを元の位置にもどしながら、あるじは言う。「見慣れん人を警戒するのはいぬの本分というものだ。ぶどう酒一杯いかがです？」

「いや、けっこうです」

「かまれはせんのでしょう？」

「かまれでもしたら、ぼくだってかんだやつに極印を残してやりますよ」

ヒースクリフの顔の表情がゆるんで、にやりと笑った。

「まあまあ、ロックウッドさん、そう興奮せんで、さ、ぶどう酒でも少しおやりなさい。この家に客人がみえるというのは、とんとまれなことだから、わしもいぬどもも、正直いうてお客人のおあしらいのしかた

をろくに知らんのです。ご健康を祝して、さあ、いかがですな？」

僕はお辞儀して、お返しの乾杯をした。下司いぬどもの無礼に、いつまでもふくれつらしているのは愚かな話だと気がつきはじめたからだ。それに、このうえこちらの気のきかぬところをさらけだして、相手をおもしろがらせてやるのがいまいましくもあった。あるじのきげんがなおったのはそのせいらしいのだから。彼は——たぶんそろばんをはじいて、ためになる借家人をおこらせるのはばからしいと考えたのだろう——端々を削り落としたようなぶっきらぼうなことばづかいを少しばかりやわらげて、僕が興味を持ちそうなと思う話を持ち出した——つまり、こんど僕が隠居所として借り入れた家の長所短所について、講釈しはじめたのだ。この話題にかけては、あるじは実になんでもよく知っている。それで僕は大いにおもしろくなり、いとまをつげるころには、よしひとつあしたも出かけてこようという気になった。先方が僕の再度の押しかけ訪問を望んでいないことは明らかである。かまうものか、行ってやる。あの男とくらべては、僕のほうがずっと交際好きのように思えるのだからあきれたものだ。

2

きのうは午後から霧が立って、寒くなった。嵐が丘までヒースと泥濘のなかを苦労して渡ってゆかなくとも、書斎の火のそばで、過ごしたほうが、と思わぬでもなかった。ところが正餐をすませて二階へ戻ろうと（注——僕は十二時と一時のあいだに正餐をしたためる。この家の家具同然に、借りると同時に雇い入れた家政婦の親切なおばさんが、五時に正餐を出してくれという僕の頼みを、どうしても聞きわけてくれない——というよりも聞きわけようとしてくれないのだ）右のものぐさな了見で階段をのぼり、書斎へ足を踏み入れてみると、女中がそだや石炭箱の散らばった床にひざをつき、ものすごい煤煙を立てながら石炭殻をかぶ

せて火を消しているさいちゅうだ。これを見て、たちまち僕は逆もどりした。帽子をかぶり、四マイルの道をてくてく歩いて、ヒースクリフの家の庭木戸にたどりついたとき、ありがたいことに、ちょうど吹雪のはじまりの驚毛のようなのがチラチラと落ちてくるのを、うまく避けることができた。

この吹きさらしの丘の頂きは、霜で土が黒くこちこちに凍り、寒気は体じゅう震えるほどだ。木戸の鎖がはずせないから、飛び越えて、ぼうぼうと乱れ伸びているグズベリのやぶで縁どられた盛土道の石だたみを走ってゆき、扉をたたいて案内を求めたが、だれもあけてくれぬ。そのうち指の節は痛くなり、いぬどもはやかましくほえたてた。

「ひどい人たちばかり住んでる家だ！」僕は心のなかで叫んだ。「こんな意地のわるい客あしらいでは、とうから世間があんたがたを相手にしないのも当たりまえですぞ。ぼくだってまさか昼間から扉にかんぬきまでおろしておきゃしない。かまうもんか――はいってゆこう！」そう決心すると、僕は掛け金をつかんでやたらにゆすぶってみた。すっぱい顔のジョウゼフが、納屋の丸窓から首を突き出した。

「なにしてなさるだ？」じいさんは叫んだ。「だんなはひつじ小屋ですがな。だんなに話があるなら、納屋の向こうをまわって行かっせい」

「家のなかには扉をあけてくれる人はいないのか？」カッとして、こちらもどなりかえすと、

「奥さまのほかにはだれもいましねえだ。おまえさまが晩までやかましい音たてて、おどかしたってあけなさる気づけえねえわ」

「どうして？　おまえがぼくのことを奥さまに話してくれるわけにゆかんのかい、ジョウゼフ？」

「いやでがすだ！　わしゃそんな掛かりあいはまっぴらでがす」

じいさんの首は、そうつぶやいたと思うと、ひっこんでしまった。

雪は本降りになってきた。僕はもういっぺんと思って、掛け金をつかんだ。そこへ、上着を着ないひとりの若い男が、くまでを肩にかついで、裏庭に姿を現わ

した。この男が僕に、ついてこいと声をかけたので、男といっしょに洗たく場のなかを通り、石炭置き場、ポンプ、はと小屋などのある石だたみの一画を通り抜けてゆくと、やがてきのうも通された暖かないごこちよろしい大部屋にたどりついた。石炭、泥炭、まき木をいっしょくたに、ふんだんにくべた大炉のほてりが、心たのしく室内をあたため、しかも夕餉のごちそうをどっさり並べた食卓の近くに、さっきまでそんなひとのいることさえ思いもよらなかった〝奥さま〟なる婦人を見いだしたときは、僕はすっかりうれしくなった。一礼して、さてご婦人がおかけなさいと言ってくれるかと、そのまま待った。彼女は、いすに背をもたせかけたまま僕を見て、身じろぎもせず、おしのようになにも言わぬ。

「ひどいお天気でございますね！」僕は言った。「失礼ながら、ヒースクリフ夫人、お玄関の扉は、お召使いたちがのんびりお客を待たせるので、よほど丈夫でないといけませんようですな。わたくしもご案内を頼むのに、よほど骨を折りました」

相手はあくまで口を開かぬ。僕はその顔を見つめた——向こうも負けずに僕を見つめる。とにかく、あくまで冷ややかな、気にとめぬさまで、こっちの顔にじっと目をすえている——どうにもたまらなくバツがわるいし、気持ちがわるい。

「掛けなさい」さきの若い男がそっけなく言った。「すぐに来ます」

そこで僕は腰をかけて、せきばらいを一つして、それから例の追剝ぎ婆アのジュノオに声をかけると、それでも二度めの対面だから、僕を知ってるというお印だけ、ほんのお情けにしっぽの端の方を振ってくれた。

「美しいいぬでございますね！」僕はもう一度やりはじめた。「奥さま、あの子いぬたちをよそへおやりになるお気持ちはおありですか？」

「あたしのじゃございません」世にもあいそうよき奥さまのご返事は、ヒースクリフの返事もよもやこれほどにはできまいと思うほど、取りつくしまもない調子だった。

「ああなるほど、あなたのお気に入りはこちらにおり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton